

会長所感 2015

会員の皆様，遅ればせながら明けましておめでとうございます。また新 OBOG の皆さん，燕舞会ご入会おめでとうございます。

昨年お話ししましたとおり，2013年の総会をもってスタートした第4期の代表委員会の体制はコンパクト化，そして若手への大幅な権限委譲の2点を核としております。会の発足時において，代表委員は世代の代表であるべきという観点から，3学年毎に選出し，各世代を網羅する委員から代表委員会を構成する配慮を行いました。発足時においてはそのもくろみは十分達成され，世代を超えた基盤づくりが出来たものと思います。しかしながら，会の活性化の観点からは若い世代が自由闊達に話し合い，機を見て敏なアクションを主体的に取れる体制が必要であり，その点が課題でした。

私の勤め先の創業者は晩年，20歳近く年下の部下に「俺はお前の歳に戻れるのだったら5億円払ってもいい」と言ったそうですが，まもなく還暦を迎える私自身その言葉の重みがかんざんとわかるようになりました。若さほど素晴らしいものはありません。新体制の真価は私たち世代が今となっては持ち得ない機動力にあります。しかし若さゆえ，実務能力や，会の趣旨の継続性に不安を抱かれる会員諸兄がいらっしやることは私も十分承知しております。しかし私は会員の皆様にお伝えしたいと思います。現代表委員会は会の伝統を引き継ぎながら，我々の世代が失いつつあった活力を再び取り戻してくれたことを。

会の創立時に定めた燕舞会のミッションは「時間と空間を超え，OB・OGの想いを繋ぐ」ことにあり，現在も少しも変化していません。しかし異なる世代間のコミュニケーションは各世代が一同に会すれば出来るというものではありません。コミュニケーションとは双方向性があるということです。各世代が互いの存在，価値観を認めない限り，同席しても気持ちは伝わらないでしょう。先輩とは同窓の友であって上司でも教師でもない。認められるかどうかは相手が決めることです。相手から認められるということは「おっ，意外と同じ事を考えているな」と気づいてもらえることだと私は思います。そして互いの同じところがわかれば時代背景の違いは乗り越えられると思っています。（もうひとつ言えば，私は既に「意外と同じである」ことを知っています）

今まで良く知らなかった先輩・後輩の「意外と同じところを探そう」きょうはそんな一日にしたいと思っております。

本澤 養樹（燕舞会 会長 東工大 昭和56年卒）

2015/01/31